

赤心流琵琶大会

十一月三日(祭)朝十時静岡市駿府町婦人会館。赤心流琵琶氏主宰の同会は毎年春は詩吟詩舞、秋は琵琶を主とした演奏会を催され当日は第十回目で会員の詩吟数十番に続いて琵琶露宮の歌一松本鶴鈴、春日野一萩野師堂、金剛石一阿井雄心、國の御柱一市川鶴峰、以上四会員のあと来賓演奏に移り西郷隆盛、浜松浦沢眞峰、高松城、京都田中勝水、北の庄、同矢吹旭美津、横笛、同梅原旭濤、柳の精、東京若宮旭登(三絃伴奏)、井伊大老、横須賀石井桑水、富樫の深、京都植村真水、茨木一横浜中谷襄水、城山、京都平井春嶺、広瀬中佐、相談役浜松小野鶴彦、瀧陽江、上同東京望月啞江、同下、同静岡岡尾鶴城、桶狭間、一會主赤心流琵琶氏。以上で全演奏を終り記念撮影の後懇親宴が盛大に催されたが永らく健康を害し自重されていた鶴翁氏が殆ど快復の状態で力の籠った節調高い歌、繊細且つ奇麗な挽捌きで「桶狭間」の難曲を美事に演奏され遠来の賛助出演者たちの愁眉を開かせたのは嬉しい限りであった。

春日野一早川、県居邸の一夜、謡琵琶会員母の教、川口、舌切雀、小野、菅公、松浦、虞美人草、竹原、酒、石川、彰義隊、高林、五條橋、大石鶴伶、俊寛、青島鶴瑛、蒙古盛、染谷鶴泉、千手の前、伊藤鶴麗、西郷隆成、一松本鶴鈴、同(中)、小野ひろみ、岩崎谷一、小野鶴彦、元寇、名古屋橋谷岳陽、井内侍一、静岡岡尾鶴城、上杉謙信、京都平井春嶺、滝口入道、家元山本鶴声。外に詩吟六題。

第十四回秋のおさらい会 十一月六日(日)昼一時半、六時東京新宿洲鳳會館、主催洲鳳會(会長山田洲鳳氏)。月下の陣、小野寺、静、辻、紅葉狩、立花、失題、一望月啞江、横笛、山田洲鳳。外に詩吟詩舞二十五番、新内一題。

第十四回薩摩琵琶演奏大会 十一月十三日(日)正午浜松市山文旅館大広間、主催鶴絃會(會長小野鶴彦氏)。金剛石、大場

熱海梧水(仁井田勇吾)氏 八月三日脳血栓のため逝去、享年七十八。大正六年長島華水氏に入門、各所に教授所を開き多数の子弟を育成。一水会秋田支部長、秋田琵琶連盟會長を歴任し、又「京絃」「錦心」に軽妙な記事を度々寄稿して琵琶人を啓発するなど斯界発展につくした功労者。尚多年市の保護司等の公共事業に力を注いだ功により勲六等瑞宝章、藍綬褒章、市文化団体連盟受賞など幾多の榮譽に輝いた。謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。(秋田市土崎港東一丁目一ノ六)

三日(出)屋一時本部平井春嶺氏宅。琵琶を楽しむ会 十二月四日(日)屋一時神戸市東灘区御影中町一ノ四ノ十五田中敬水氏宅(阪神電車御影駅下車徒歩二分)。一般参加歓迎、会費不要。各派琵琶名流演奏大会 十二月七日(水)一時東京日本橋三越前第一証券ホール、主催むさしの琵琶研究会。(千円)各流派合同琵琶演奏会 十二月十一日(日)正午京都東山松原上ル安井金比羅會館、共催京都琵琶協会・一水会京都支部。

昭和五十二年十二月一日発行(非売品) 編集者 植村 實 行集者 高槻市津之江北町一ノ二番 電話 〇七二六(七三六)〇五一番

地唄の「茶音頭」や「雪」に合わせて、薄茶のお点前をする人があります。この場合は、なんといいますか、ムード音楽といったようなもので、はじめから終わりまで、お点前と曲がピッタリ合わなければいけないということはありません。

秘曲・茶絃録

この曲は、九大教授河原杏子医博のつくられた歌詞に、わたくしの琵琶の先生の石村涼月師が作曲されたものであります。石村先生は、琵琶の先生であると同時に、お茶を深くたしなまれた方でありましたから、お点前をする人が、より一層閑寂幽玄な気持ちになるように、この曲をつくらうと思ひ立たれ、昭

琵琶 機関紙

京

結

第二八二号 京絃社



一条 旭 磨

和のはじめに完成されたのであります。歌詞の内容は、天正十五年十月一日に豊臣秀吉が京都北野天満宮で行った北野大茶湯(きたのおおぢのゆ)のさかんなありさまをうたい、茶人として千利休の徳がいかに高かったかを述べたものであります。演奏時間は約四分間で、亭主が茶道口からはいってきて、お点前をして、また、茶道口から退出するまで、ピッタリと演じつつけることになっていきます。

沐浴してから琵琶のけいこ

わたくしは北海道函館の生まれで、家業は北洋漁業に従事しておりました。一家をあげて、茶道、美術、演劇などを好んでいましたので、わたくしも、少年時代から琵琶を習ったりしていました。裏千家先代の淡々斎宗匠が立ち寄られたこともありまして、母や家内(一条宗孝)も裏千家流を学び、家内はいま

でも茶道の勉強につとめております。わたくしは東京へ出てきましたから、石村先生に琵琶のおけいこをしていただくようになりしました。たいへんに熱心な先生で、わたくしが仕事をすまして、夜おそく帰宅いたしましたのを待っていてくださって、真夜中でもおけいこをされました。

頭山翁のすすめて跡をつぐ

石村先生は、昭和十三年三月三日に永眠されましたが、その四十九日忌に頭山満翁から「故人があれだけ力を入れたものだから、あなたは一生けんめい跡を継いで、保存してやりなさい」といわれ、いよいよ決意をかためました。ただのお点前だけではなく、また、ただの琵琶演奏だけではなく、茶絃一致といえますか、その境地に達するのがたいへんです

が、ピッタリ合いましたときには、見ておられる方をふくめて、酔ったような気分になるのでございます。

後継者をさがしているが...

「茶絃録」の存在は、かなり有名になりまして、戦時中は、しばしば、家内といっしょに東京・九段の軍人会館の舞台で公開されました。また、戦後は、北海道から鳥取まで、各地のお茶人の間を回ってお手合せをしまして、少し慣れた方は、演奏に合せて、お点前をされました。その意味では、石村先生の曲は、たいへんによくつくられていると考えております。

ただ、わたくしも七十八才になりましたので、そろそろ、この「茶絃録」をたれかに伝えなければならぬと思っておりますが、いまのところ、それにふさわしい人がおりません。琵琶のこともわかり、お茶のこともわかってゐる方ではないと、この秘曲の精神を理解してもらえないからであります。

沢庵禪師が、その師千宗旦に学んだことを書いた茶禅一味の書に「禅茶録」という有名な書物がございますが、茶と琵琶の調和を旨とした「茶絃録」はまことにありがたい秘曲だと考えております。(筑前琵琶「茶絃録」継承者)

十月八日サンケイ新聞から転載「原文のまゝ」。夫人のお点前で一条氏が「茶絃録」演奏中の写真は省略(一係)



我が道を行く 六十五年(五四)

西郷 天風

次いで七月末、定期演奏会の翌日だった、相変らず満員の盛況に、祝賀の意をこめた一泊旅行を大貫海岸に求めた。

其処は水戸市から最も近い海水浴場としてバス又は電車で四、五十分の宿場町乍ら、磯節の民踊で有名な大洗に隣接する半農半漁の中々捨てがたい町である。

その中心部商店街を通り抜けたバスは、一旦坂道を下りきって、再び上りつめた高台に角屋という宿屋があり、いつも静かで、バス停も近いので、常時行きつけの關係から、泊りはそこに定め、二階の縁から長汀曲浦の飽かぬ眺めに見入って居ると、

「やあ...天風先生」と叫びながら坂道を上って来る人力車のお人は、今しも往診から帰るらしい元軍医中佐、石川医師のこやかな笑顔だった、これは体の転地療養でこの海岸に来た時から、主事医として御厄介になった恩義のある先生である。

「お一人ですか」と聞く。
「イヤ...先生、御無沙汰して、すみません、実は昨晚、水戸で会をやりまして、そ

の慰安の為め一行四名の一泊旅行です”
「オ...それはよいことを聞いた、あとで迎えをよこすから是非来て下さいよ、頼む」といって車を急がせて行く、その後ろ姿も張切って見えた。

やがて一人の女子が訪ねて来た、石川医師から招待の使者で前後三回に及んだが、小田原氏ら三人は、折角繁雑な都会生活から開放され、又と得難いこの「のんびり」とした良き日を返上することに抵抗を感じてか、誰もよい顔をしない。その心情を察すれば、私人の義理を押し付けることもならず逡巡していると、遂には、涙をたぐえた四度目の使者を迎えるに至った。彼女は石川軍医殿から、

「おまえの態度に誠意が欠けておるからだ」と叱られ、私は立つ瀬がありません”と。これには私も途方にくれ、彼女を二階に招じて三人に逢せれば、流石に三人共兜をぬぐしかなかった。しかしこれが後日、楽しい思い出の因となるなぞ、思いもよらぬことだった一方、ようやく使命を果たし得た彼女は、

喜びの足取りも軽く先頭にたてば、後に続く賓客も見なれぬ町の風物をながめ乍ら潤歩する様子も楽しそうである。
かくて程なく病院の玄関に至れば、直ちに廊下から座敷へ、そして次ぎの間の襖をあけた途端、背を向けて坐していた軍医殿、うしろに振向くや咄嗟に、

「ヤア、来て呉れましたか、ありがとう、ありがとう：万々才あーい」と、

双手を頭上高く差上げ、腰を浮かせながら小供のような仕草で、大の男が喜ぶその様子に、さすが三人の賓客も堅苦しい感情など一気に吹飛び、国尊氏の如きは此の様子に感激の眼をほそめ、口をもぐもぐさせ乍ら静かに坐し、一同を代表して、

「お待ちして、まことすまん事でした」といんぎんに謝辞を述べて自己紹介をすれば、他の二人もそれぞれ名乗りを揚げた。

続いてこの三人は、現に東都琵琶界に於ける代表的一流名手で、いずれも薩摩人であることを物語れば、石川軍医殿、それは又誠にありがたい、かゝる名人と膝を交えて歓談を共にする喜びは、総て天風さんの御蔭ですよ、今日はゆっくりに楽しませて下さい。といかにも嬉しそうな眼差しで、一同に挨拶するのであった。

かゝる間に、特大の円卓上には数本の冷しビールを中央にして、山海の珍味が所せましく運ばれた。
折しも中秋の陽はいまだ高く、爽快な潮風のただよう八畳間の献酬いよいよ酣ともなれば、近海鯉のいきいきした刺身に舌鼓の賓客が、お国訛での談論風発を耳にした軍医殿、昔日の感慨止み難く、家人に命じて、乃木閣下手づから賜ったと云う詩軸を床の間にかけ、自慢話に花を咲せれば、賓客連は合議の末、その夜一人掃京する筈の小田原氏が持参した琵琶を角屋から取りよせ、先づ国尊師の「乃木大将」より初まって、貴島桃源師得意

の「旅順開城(上段)」、林龍山師の「城山」天風の「錦の御旗」等々前後二時間余、それも愉快な雰囲気の中で、只々興のおもむくまゝの熱演は亦格別ながら、桃源師の「旅順開城(上段)」に至っては正に天下一品、かつてない出来栄で、それ以来私はこの旅順開城に習い、得意とする迄に至ったものもありがたい思出の一つである。



続。私の音楽ノート(二)

水藤 五郎

流派解消考

政界では、特に自民党、社会党の二大政党に於ては、流派の解消ならぬ、派閥の解消が永長の課題となっております。

人の集合体の中に、一分派一分派と小集合がつくられるのは、ある意味では、当然且つ自然の流れであるとする解釈もあります。が、これがあまりにも多くなったり、又、派単位の結合が強すぎたりして、全体の集団活動に障害となるような場合に至った段階では、この派閥肯定論は否定されることとなります。しかし、現実には、なかなか派活動は解消されなればかりか、益々その弊害を多くしているようです。ただ、派とは云わずに〇〇会、〇〇グループ等の名称変更はなされていて、

一見、派は解消された様に見せてはいます。このように政界に於ける動きは、国民の希望の反映なのですから、芸界も流派については当然それなりの対策も講じなければならぬわけです。もう少し政界に学んでみますと、政界に於ける革新陣営の不振は、とりも直さずその分派、分会活動に依る力の核散であります。政権を目標にして戦い、それを勝ち取る為には、大同団結しかないので。今日の小党分立と、野党第一党の社会党の混乱は、労働組合や社会活動団体の歴史が集合離散の歴史であつて、論理の為の論理であることから、人の和が得られないことを原因としているようです。この点は、保守政党の団結力には遠く及ばぬものであります。

さて、芸の道に於ける流派も同様であるように思えます。これからの日々、琵琶を生きて残してゆくことを願うのなら、この流派解消は必ずやらなければならぬ問題です。現代邦楽と云う分野、勿論、これが絶対的に正しい在り方かどうかは別として、この中に於ては、流派は既に意味のうすいものになっています。

現代曲の演奏では、箏の山田流も、生田流もない、新しい作品を演奏する行為自体が重要なのであります。これは、尺八に於ても同様で、都山も、琴古もないわけですから、琵琶界で云う、薩摩とか筑前、私の演奏する錦とかは、本来は楽器の種類であり、音楽性の名称であつたのですが、永年の間に、絶

対的流派になってしまつて、琵琶人を身動きの出来ない形にしてしまつてしまつた。薩摩の中に正派と称する人々がいまいます。これは面白い呼称で、正派と云う位ですから、正しい派、つまり正統とでも解し得る意味なのでしようが、何に對して正しいのか、錦心流が生まれたためにそう稱するようになったのでしようが、もしそうであるとすると、随分錦心流に對しては失礼と云うか、第三者からすると、自信過剰と云うか、良き時代の出来事です。

薩摩琵琶、筑前琵琶と云う呼称の段階では、共に津軽三味線と同じく一地方の民謡(間)音楽と解することが出来るのです。この論理でいけば、薩摩正派は九州の鹿兒島に居住させておきたいと思ひますし、正派を聴くと、鹿兒島の風景や人物が偲ばれる芸能であることが理想であります。少なくとも、津軽三味線はその様であります。勿論、遠い昔、明治大正の頃は、九州出身の士族の直系が居て、このような理想的な芸風もあつたのでしようが、今日ではそれは望めないわけですから、さすれば正派なる派はいらないのですから、古曲研究会でも良い訳です。(この名称を用いてゐるのに辻崎剛師の教室があります、私は賛意を表したくなる名称です。)

さて、この古曲を演奏する以上、新曲(今日では古くなったのですが、その当時は)である錦心流についても演奏修業を積んで、始めて琵琶人となるのではないのでしょうか。

錦心流は、その当時、都会的に創案されたものなものでしたから、その芸風は今日でも東京、大阪を中心に好まれる余地は残つていません。その都会地で演奏会を開くのに、その地域性を考慮に入れなければ、少なくとも愛好者が増加させることは望めないでしよう。さすれば、その都会人に訴へる芸風のレパートリーを持つべきでしよう。また反面、東京で津軽三味線のレコードが売れる今日、薩摩琵琶のレコードが売れないのは何故なのか、それは、津軽三味線が津軽の哀愁を出すのに對して、今日の薩摩琵琶が薩摩から遠く風景、芸風、そして内容等が離れてしまつたからでしょう。

新しい都会人に訴へるレパートリーはやらす、また都会人が失なつてしまつてしまつて、探し求めている地域性から離れてしまつてしまつて、これが今日の状況であり、不振の因なのでは、と思ひます。そして、それはあまりにも絶対的な流派感が出来あがつて、その分野では完成された芸風であつても、広い意味での琵琶では一面にしか過ぎないのです。これからの展望を述べると、多くの琵琶人が、この二面性を守備範囲とし得る気風をつくることでありました。三味線の世界で、豊後節は極めて細分化されて、その狭い範囲で、完成された芸風が作られました。しかしその反面、絶対的な身動きのとれない流派となつてしまつた。大衆性は失なわれてしまつた。この意味からも、あまり流派、薩摩の何とか筑前の何とか、錦とか云うことよりも、大切なのは琵琶であり、その全ての面を演じ得るべく努めることなのであります。

明年一月一日発行の本紙は例年の通り正月特別号とし紙数を増して内容豊富の記事を満載、併せて新年交礼号として貴名を掲載させて頂きたいと存じます。

新年特別号発行について

遠隔地同好者間の旧交を温ため、且つは京絃援助の思召しをも含めて多数御協賛下されたく、別紙申込用紙に料金を添え十二月十日迄に御申込み願ひ上げます。

西郷隆盛の

魅力を語る(二)

編集部

明治十年九月二十四日、天下の耳目を集めた西南戦争で琵琶歌に馴染の深い西郷隆盛が没して今年で百年(近代日本の夜明け、維新の変革を推進し、指導した西郷は維新後の征韓論争、西南戦争に巻き込まれた。その歴史の評価はさまざまに分かれてゐるが、「大西郷」と呼ばれ「西郷どん」と慕われたその人間の魅力は、スケールの大きな反抗精神と私利私慾のない庶民性のゆえだろろうか。実像、虚像入り乱れる西郷隆盛について「隆盛年譜」を記し併せて司馬遼太郎、萩原延寿両氏の対話を朝日新聞から転載する。

隆盛年譜

一八二七(文政一〇)年、薩摩藩の下級武士の家に出生。

一八五四(安政元)年、藩主島津齊彬に從ひ江戸詰め、一八五八(安政五)年、將軍継嗣問題で一橋慶喜擁立で奔走、井伊直弼大老就任と共に始まる安政の大獄で幕吏に追われ僧月照と共に帰藩、月照とともに入水するが西郷だけ助かり藩命で奄美大島に流される。

一八六二(文久二)年、赦免となり帰藩、藩主久光上洛の先発として下関に到つたが、京都の情勢が急変したのを知り、無断上阪し志士と交わる。久光の怒りをかい帰藩、沖永良部島に流される。

一八六四(元治元)年、許されて帰藩、禁の変に活躍、長州軍を撃退した。長州征討の参謀として事態を收拾。一八六五(慶応元)年、幕府の長州再征の出兵を拒否、一八六六(同二)年、長州の桂小五郎(木戸孝允)とはかり討幕のための薩長同盟が成立。

一八六七(同三)年、藩論を統一して上京、大久保利通らと王政復古をはかり、將軍慶喜は大政を奉還。

一八六八(明治元)年、鳥羽・伏見の戦を指揮して幕府軍を破る。東征大総督府参謀として江戸に入り勝海舟と会見し、江戸城明け渡しに交渉に活躍。東北地方を鎮定し帰国。

一八七〇(同三)年、岩倉具視、大久保利通らの説得で新政府に入り、翌年参議となり、薩藩置県を行う。

一八七三(同六)年、朝鮮問題解決のため遺韓大使となるが、遺韓大使は中止となり、辞任して帰郷。翌年、私学校を開く。

一八七七(同一〇)年、私学校生徒の火薬庫、造船所襲撃をきっかけに西南戦争起こる。熊本城攻撃に失敗、城山陥落し、桐野利秋らと自決。

一八八九(同二二)年、罪を許され、正三位を追贈される。

巨大で多彩なイメージ

司馬 ホーチ・ミン、毛沢東、西郷を並べて考えてみたい。ベトナムを含む古代中国文明とかかわりを持ったアジア国内には一種の聖人待望論というのがある。日本では荻生徂来が、わが国には聖人が出ないと、絶望的なことを云うわけだが、中国大陸には出る。私の日本政治史に対する感じでは、日本は本当に優れた政治家を出そうという気があまりない国だ。なぜなら水稲農業の適地であり、アジアの半乾燥地帯やヨーロッパの牧畜農業などの地理的条件の中におけるように、さほどコンダクターを必要としない。將軍たちがあれだけ遊んでいた室町時代にも当時では最高の農業生産高をあげてゐることもわかるように、政治が生きてゐることでもわかるようなところがある。それで、日本ではなかなか見事な政治家が出ない。そこへ西郷という人物が出てきてみんなビックリした。

ホーチ・ミンがこれに似てゐる。横町のオッサンのイメージもあり、私慾がないという点で透明度が高い。毛沢東ともやや似ている。ただ毛沢東の場合、ものを書いている。書き過ぎるほど書いている。しかし、西郷は書簡と漢詩を書いてゐる程度で、どんな人物だったのかということ、同時代の人に聞いてもよくわからない。革命家としては造形性が明快ではない。が、非常に大衆を動員する力を持っている。そういう意味ではあるいはホーチ・ミンよりは上ではないかと思つたりする。

萩原 イギリス人アーネスト・サトウも西郷好きだったようだ。彼がどれ程西郷をわかってゐたのか定かでないが、ただ西郷に何かを託してゐて、それで西郷が好きになつてゐるところがある。いろんな人がいるイメージを西郷に託してゐるのではないか。進歩に對する保守、画一性に対する多元性、中央集権に對する地方分権、前者は大久保利道によって代表されるわけだが、後者の価値を体現するものとしての西郷というイメージがある。

司馬 託せるだけの巨大な思想的ふん詰りがあつた。

萩原 明治維新以後の近代化のスピードがイギリスの経験からいうと早すぎる。更に大久保利通のやり方は少しきつすぎる。そういう対比でサトウは西郷を見てゐる。或いはそういう経験が西郷像に投影されてゐる。もつと細かく政治レベルでいうと、中央集権化が

むごたらしく進む。イギリスにもウエールズやスコットランドなどがあり地方自治の伝統は長い。これと日本の藩を同じような次元で考えたとき、二百幾つもあった藩があれば、単純に中央政権でつぶされてゆく。このような近代化ということに対する一種の疑問がサトウにはかなり根深くあった。だから西郷の鹿児島からの抵抗に対して心情的な共感を持った。期待までいったかどうかはわからないが、少なくとも共感まではあった。(続く)

大阪琵琶同好会秋季琵琶諸芸大会

十月三日(月)昼一時大阪市立平野会館。左記演奏で満員の盛況であったが特に九十二才の高齡佐藤旭竜氏の一曲は聴衆に多大の感銘を与えた。君ケ代(会員合奏)赤垣源蔵(米原丸)佐藤旭竜(本能寺)辻旭城(大楠公)作花友友(菅公)野々村旭川(姫百合の塔)石橋旭嶺(湖水渡り)中山鳳水(宮本武蔵)田中敷水(若き敦盛)天津八千代。外に民謡、詩吟舞、奇術等十四題。

尚石橋旭嶺氏は十月六日(休)日本公衆電話会近畿地方本部大会が大阪御堂会館で開催の席上「姫百合の塔」を演奏されたが、沖繩玉碎乙女たちの三十三回忌で参列者も感激した吟九題。

西独逸の作曲家入洛

十月五日(休)西独逸のストックハウゼン氏来京。田中鶴水琵琶コレクションを鑑賞したあと矢吹旭美津女史宅を訪ね矢吹、田中両氏による琵琶演奏法実演やこれに伴う詳細な説明を聴き

満して離京された。同氏は著名な作曲家で日本古典音楽に深い興味を持ち既に雅楽、尺八などを作曲して十月三十一、十一月一日の両日東京国立劇場で開催の宮内庁雅楽部主催の雅楽演奏会に列席して帰国の予定。尚田中鶴水氏は日独親善の一助にも四絃筑前琵琶(挨拶)一面を無償贈呈された。

三位研修同志会十月例会

十月九日(日)昼一時三鷹市公会堂。伴流能勢風謡切り連弾(錦幽、錦道)乃木将軍(山崎錦幽)湯陽江(田戸桜丸)葉児(富田秀明)安宅の関(坂本錦道)秋思(西村嘉峻)異国の丘(錦幽)川中島(伊集院誠城)似蝦(立野岳朝)。以上研修演奏をして小宴の後散会。

越谷市文化祭に鈴木流泉氏演奏

十月九日(日)越谷市立福祉会館で邦楽、吹奏楽、謡曲、民謡、詩吟など多彩な催し物があり琵琶は鈴木流泉氏が「壇の浦」の一曲を演奏、好評を博した。

日本芸術琵琶会十月例会

十月十六日(日)昼一時東京西新宿柏ビル六階。お江戸日本橋。門琵琶。伴流弾法(錦幽)小曲本能寺。山科の別れ(坂入俊風)彰義隊(若林鶴山)鉢の木(杉山旗水)大菩薩峠(橋本草水)乃木将軍(山崎錦幽)接待(宮本武蔵)旗水(大物の浦)若宮旭登(平家物語朗読)雨宮映月。以上研修の後小宴、七時散会。(長谷川錦舟、高田登水、青木早水三氏欠席)

錦心流琵琶演奏会

十月二十二日(出)夕五時半東京上野本牧亭、主催一水会本部企画部(七百円)。紅葉狩(杉本涼水)八甲田山(河合桃水)秋海棠(福

島辰水(木村重成)小材政水(西郷隆盛)青木早水(小栗栖)秋山溪水(巖流島)青木灯水(舟舟)甲田勸水(山科の別れ)樋口主水(異国の丘)杉山旗水(茨木)鈴木琢水(白虎隊)宮原渾水。

筑前琵琶橋会全国大会

十月二十三日(日)朝九時半北九州市福祉文化センター音楽ホール、司会九州地区支部。本年度文化祭協賛。秋晴れの好季節に東西各地区の選良が一堂に集まって四十曲が熱演され橋会独自の妙味を遺憾なく発揮して人気沸騰、特に特別番組「茶絃録」は歌六、絃七、琴一、茶道六の大舞台で大向うを唸らせるなど終始満員の盛況で本年度の一大行事を成功させた。尚前日の二十二日は総会、懇親会が開かれた。

平野鉦水五十周年記念演奏会

十月二十三日(日)朝十時半逗子市立図書館ホール、主催鉦水会、主催市教育委員会。市文化協会。金剛石(稲子)城山(樋口)小松、大越(霧の川)中島(大越)城山(樋口)静(佐藤)菅公(今)川中島(樋口)常陸丸(内藤)治水(鉢の木)坂井田政水(井伊大老)脇田湘水(別れの盃)姉崎証水(曲垣平九郎)鈴木松陽(衣川)樋口精水(新曲本能寺)本庄宵水(大高源吾)三門葉水(琵琶舞石重丸)白井紫紅(小林紫舟)絃(会主)平野鉦水(竜の口)高橋旺水(羅生門)今井城水(乃木大将)森梓水(井内待)甲田勸水(姫百合の塔)土橋虎水(雪晴れ)斎藤珠水(堅田落)梶ヶ谷水(屋島の誓)荒井姿水(小栗栖)鈴木謙水(敦盛)梅沢河水(白虎隊)山田幻水(雪の進軍)榎本山水(明鳥のお吉)石井桑水(舟舟)藤川晴水(高橋理水、松本孝水、鈴木琢水)湖水乗切(山口速水)茨木(

宮原渾水。外に詩吟詩舞四題。

故鈴木岳亮氏追悼演奏会

十月二十三日(日)昼十二時半秋田市協働社大町ビルホール、主催一水会秋田支部。月下の陣(福地)桜狩(佐藤)白虎隊(佐々木美水)羅生門(佐山録水)別れの国歌(高井新水)吹雪の敵(船水)吉野山(新開領水)毒饅頭(保坂遊水)西郷隆盛(竹内信水)川中島(星野巖水)録音御夢(跡)故鈴木岳亮(本能寺)酒田阿部志水(別れの盃)鶴岡田中(水)新撰組(新編加藤友水)舟舟(横浜中谷)渾水(淀君)支部長松井灯水。外に詩吟九題。

筑前琵琶演奏会

十月二十三日(日)昼十二時半福岡市大博多ビル十二階ホール、主催筑前琵琶保存会(会長嶺旭蝶女史)。君ケ代(五才男女児三人)夜討(曾我)一五才一、七才二人(扇の的)八才二、九才一、十才一人(元寇の乱)十一才一、十二才二(藤巴)嶺旭蝶外十三人。立方一(義士の本懐)旭嶺外三人(屋島の誓)青山旭子(安宅)内田旭湖(八甲田山)東京田中鶴旺(立花実山)旭蝶、旭子、琴一、茶道三人(秋三章)琵琶旭蝶、旭子、尺八二、第一、三絃一、鳴物。

筑前琵琶旭会全国大会

十月二十八、九両日(出)朝十時神戸市泉民小劇場、司会神港旭会(会長柴田旭堂女史)。第一日四十三曲、第二日四十曲の独奏、合奏琵琶舞等合計八十三曲を東西全国の古豪、新人が覇を競い筑前琵琶の真髄を存分に発揮した。又日舞六、剣舞二、箏二、華道十、茶道五の豪華版を随所に組入れて聴衆を酔わしめた。翌二十九日は会場を姫路市に移して総会、懇親会が開催され本年の一大行事を滞りなく終了、成功を納めて盛會裡に散会した。

一水会武蔵野支部演奏会

十月二十九日(出)夕五時半東京上野本牧亭、主催(支部長杉山旗水氏)。本能寺(押谷君水)村上喜劇(藤井潮水)景清(上)高田登水(宮本武蔵)杉山旗水(西郷隆盛)高橋理水(湖水乗切)白倉詩水(川中島)橋本草水(以下応援出演)静(角田置水)竜の口(河合桃水)井伊大老(座間煖水)俊寛(下)荻野

昇伝披露秋季琵琶演奏会

十月三十日(日)朝十時埼玉県寄居町中町会館、主催一水会埼玉支部(支部長原田刀水氏)。小栗栖(原田曲水)山科の別れ(根岸晃月)異国の丘(小野流水)鉢の木(河井志水)屋島の誓(齊藤桜玲)出家熊谷(今泉迦水)竜の口(根岸流水)道成寺(野口嶮水)白虎隊(茂木勉水)五条橋(井上当水)城山(落合白水)羅生門(山口速水)紅葉狩(町田路加)渡守甚兵衛(大井錦造)。(印奥伝披露)

二故人追悼錦心流琵琶演奏会

十月三十日(日)正午大阪市立西区民センターホール、主催一水会大阪支部(支部長小川吟水氏)。本年二月逝去の関西錦心流元老故東憲水氏と昨年二月逝去の関西西錦心流元老故東英水女史の追悼会支部員数氏の外東京、京都、大阪、神戸の賛助来賓を迎え御遺族や熱心な多数の琵琶ファンを前に夕六時半迄真心こもる熱演が続けられ終演後記念撮影、乾盃で故人の冥福を祈って滞りなく終会した。金剛石(有志)吉野山(懐古)増田(城山)中野、住田(木村重成)中山(娘水)巖流島(北村玄水)金寄(靖水)湖水(乗切)養老(駿水)宮ノ原(聖水)松葉(卓水)井伊(大老)小西(雨)水(五條橋)稲葉(卓水)近藤(登水)杭東(詠水)好中野(淀水)追悼詩(菊水)屋島(の誓)尾山(絃水)伊豆(の御)飯塚(棟水)木村(蓮水)横笛(中山)鳳水(御舞)藤間(勘娘)外一(東憲水氏遺子)台湾(入)大阪(伊勢谷)安江(新撰組)神戸(楊水)白虎隊(京都)馬場(鴨水)竜の口(大阪)野尻(撰水)小督(の局)京都(植村)真水(楊貴妃)神戸(三浦)蓮水(戻り)橋(大阪)広瀬(敏水)谷(暉水)乃木(将軍)東京(松岡)遊水(石童丸)同

第十六回琵琶と詩吟詩舞の会

十月二十三日(日)正午西宮市夙川公民館松下ホール、主催西宮市琵琶詩吟同好会(会長三浦蓮水女史)。市文化祭参加。金剛石(蓮水)會員一同(紅葉狩)田中、木の宮(河)中島(山下)村上、堀田(大和)懐古(高原)吉田(本能寺)田村(魁水)絃蓮水(別れの盃)山崎(蘭水)屋島(懐古)吉山(瞳水)菊水の旗(反町)紫水(淀君)川上(埜水)新撰組(楊水)朝(王)と虞美人(東京)水藤(五郎)小栗(栖)名(古)屋(三輪)桃水(舟舟)慶(静岡)太田(杯水)琵琶(舞)小督(滝沢)三浦(立方)二(村上)喜劇(大阪)稲葉(卓水)近藤(登水)楊東(詠水)中野(三浦)蓮水(天祥)京都(平)春嶺(植水)中長(三浦)蓮水(外)に詩吟詩舞舞舞二十五題。当日は天好に恵まれ秋の会にふさわしく終始大入満員で聴衆を陶醉せしめた。終演後懇親会に移り乾盃して和氣霽々裡に散会した。(印教師昇伝披露)